

「働いて、元気になる!」

— 公益財団法人 住吉偕成会 住吉病院 —

職場
ルポ

●特集● 医療・介護の現場で働く



(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



取材先データ

公益財団法人 住吉偕成会 住吉病院

〒400-0851 山梨県甲府市住吉 4-10-32
TEL 055-235-1521 FAX 055-235-1507

■院長: 中谷真樹
■設立: 1955(昭和30)年
■診療科目: 精神科

keyword: 精神障がい、障がい理解、IPS、勤務時間の配慮、医療・福祉業、就業・生活支援センター

POINT

- ① 精神疾患を持つ人の雇用に積極的。病院での就労を基礎にして、一般企業での就労を目指す
- ② 能力や個性、性格にあわせて業務配置
- ③ 長続きのコツは頑張りすぎないこと

「ALL for Recovery」を掲げて

「住吉病院」はいまから半世紀以上前、1955（昭和30）年に精神科医療の専門病院として、JR身延線・南甲府駅近くに設立された。アルコール依存症の治療でも山梨県の草分け的な存在だ。設立以来、精神障がい者の治療、社会復帰に力を注いできた病院の概要について、副事務長の野川正樹さんに説明を受けた。

「当法人は、精神科の専門病院と社会復帰施設を備え、医師と職員がそれぞれの立場から協力して、精神障がいを持つ方の治療と早期退院、社会復帰に向けて努力しています。2008年には『私達は すべての人々への人間愛の精神を大切に ぬくもりある医療福祉をもって 社会に貢献します』という『HEART・fullメッセージ』2008』を作成し、このメッセージを職員の名札の裏に印刷して、職



野川正樹副事務長

務のよりどころとしています」

2010年に県の認可を受け、公益財団法人となった「住吉偕成会」は「住吉病院」と「訪問看護ステーションきらり」、「リカバリーセンターすみよし」で構成されている。病床は306床。病院には医師、看護師、職員を合わせて224人のスタッフが、入院、通院、デイケアなどを行い、精神科の薬の相談を受ける薬剤師外来もある。リカバリーセンターには生活支援センター、自立訓練、ショートステイを行う施設やグループホーム、就労移行支援の作業センター、障害者就業・生活支援センター、ベーカーリーカフェなどがあり、34人のスタッフが利用者者の社会復帰を総合的に支援している。

2007年、院長に就任した中谷真樹なかたに まさきさんは「ALL for Recovery」を病院の理念に掲げて、翌年から精神疾患を持つ人の雇用を積極的に始めたという。

「以前から、職場訓練や就労支援を兼ねて、数名の障がい者に1年ごとの短期就労形態制度を実施していましたが、院長が提唱した『ALL for Recovery』を合言葉に、障がい者の就労により積極的に取り組んでいく方針が打ち出されました。症状を消し去るのではなく、『回復リカバリー』を目指す。『リカバリー』は単なる回復という意味合いではなく、地域で生活し、働き、完全に社会参加するプロセスを意味しています」と野川さん。

病院では精神障がい者13人、知的障がい



一ノ瀬富佐雄副院長（左）

い者1人が、看護部の看護補助、活動療法部の事務補助、事務部の清掃員として、リカバリーセンターでは精神障がい者1人が清掃員として働いている。副院長の一ノ瀬富佐雄ふさおさんは、看護部顧問として彼らの働きを見守っている。

「院長の方針は、薬を減らすことや、働くことを通して元気になることです。社会復帰は人それぞれで、入院が長い人もいます。リカバリーがまだむずかしい人もいますが、『いま生きていくこと』が大切なのです。『障がいや病気があっても働ける』、



活動療法部のスタッフとして、相談室、デイケアの事務担当として活躍する重廣泰世さん

『就労はリカバリーの重要な要素である』と考え、障がい者が働きやすい職場はすべての人にとって働きやすい職場だと考え、いろいろな取組みをしています」

働くまで —それぞれの挑戦—

住吉病院を退院後、同病院で働く4人の精神障がいの人たちを紹介する。重廣泰世さん（28歳）は、活動療法部の事務補助として、主に相談室とデイケアの事務を担当し、院長のスケジュール管理、就労支援などにもたずさわる。重廣さんは、ほかの病院から転院して入院生活を送った後、ベーカリーカフェのボランティアをしたり、デイケアや就業・生活支援センターを利用

してから、入職した。

「法人が掲げる『HEART・fullメッセージ』2008」と『All for Recovery』に魅力を感じて、自分でも実践し、人のお役に立てるならこれ以上の喜びはないと直感して、入職したいと思いました。入職して5年、調子の波はありますが、職場の人間関係がとてもいいので、頑張れるのだと思います。気をつけているのは接遇です。病院でお世話になった私が、すべての人に恩返しできれば、そして私の存在がだれかの役に立てればいいなと思います。これは私の働きがいにもつながっています」

重廣さんは「WRAP（ラップ）」※「元気回復行動プラン」ファシリテーター※も務める。自宅から自転車通勤。休日にピアノを弾くのも楽しみの一つだ。

2012年から働き始めた鈴木愛さん（32歳）は小中学生の頃に発症し、16〜23歳まで東京の病院に、27歳まで住吉病院に入院していた。退院後、一般就労したがうまくいかず、再入院。デイケア、作業センタールに通いながら、再度、就職したいとの強い希望で、住吉病院で働くことになった。半日から勤務をはじめ、現在は8時45分から17時15分までのフルタイムで、看護補助員として掃除、消毒、お弁当の片づけなどをサポートしている。法人借上げのアパートで暮らし、休日は図書館で本を読んだりして過ごす。

鈴木愛さん、看護補助員として、清掃、消毒、弁当の準備、片づけと忙しく働いている



「入院していたとき、看護補助員さんの働きぶりを見ながら、こういうふうになりたいと思っていました。掃除の仕事は好きです。30歳手前まですごく苦しかったのですが、いまは幸せです。まだ課題が多くてもどかしかったりしますが、『うれしい』という感覚がたまにあるので、自分のペースで働きたいと思います」

塩沢豊さん（49歳）も、法人が借り上げているアパートで生活している。陸上自衛官を任期満了で退職後、20代半ばで気分の変調が始まり、その後、統合失調症で2〜3年入院したという。一度職に就いたが離職、その後ブランクがあり、今年5月に再就職。看護補助員として、ローテーションで勤務する。空き時間はほぼ毎日、生活支援センターに顔を出し、ピアサポーターとしての活動も行っている。放送大学で勉強をしたり、休日はドライブに出かけた仲間と過ごしたりする。

※WRAPファシリテーター…WRAP（元気回復行動プラン）の進行役をつとめる、コーブランドセンター公認の資格

WORKSHOP REPORT



ピアサポーター、看護補助員の塩沢豊さん。患者のみなさんへのおやつ配りを担当していた



「自分で、体調のいいときと悪いときの波がわかります。服薬は終わりましたが月1回、注射を打っています。患者さんには顔見知りも古くからの友達もいますので、家庭的な雰囲気、仕事をしやすい環境です。最近は仕事を1人で任されることもあります。責任を持たされると満足感があります。充実しています。言葉遣いに気をつけて、患者さんに愛情を持って接すること、看護師さんたちや同僚に迷惑をかけないように、役に立てるように努力をすることを心がけています」

佐野秀子さん（63歳）は17、18歳のころ、交通事故で記憶喪失になり、その後統合失調症を発症。入退院を繰り返したが、その間にバスガイドを半年、スーパーマーケットに8年勤めた。住吉病院は60歳で退院。看護補助員として週3日、患者たちとカラオケを楽しんだり、簡単な勉強を教えたり、絵を描いたりなどのレクリエーションを担当して3年目になる。そのほか、寝たきりの人、自力では移動できない人、1日黙って座っている人に話しかけたり、散歩に連れて行ったりと、患者にとっては心安らぐ存在だ。グループホームで生活して、休日にはカラオケや、家族と食事を楽しんだりして過ごす。

「院長先生から、『レク担当の看護補助員をやってみないか』といわれて、うれしかったです。いろいろあったけれど、いまの仕事が一番いいと思っています。みなさ

んの具合が悪いときは表情でわかりますから、励ましてあげます。患者さんを愛して、患者さんの生活を守りたいです」

「精神疾患を持つ人」の働く姿が、希望を与える

精神科病院なので、精神障がいに関する理解と配慮は十分。精神障がい者には働きやすい環境がある。短時間勤務からステップアップして、フルタイムで働く職員もいる。作業センターを利用して人々や、外来診療にきた人が、病院で働きたいと申し出るケースもある。

住吉病院では、IPS (Individual Placement and Support) 個別職業紹介とサポート」といって、症状が残っていても、働くことを望む人には、訓練よりも職場での実践トレーニングを重視して、例えば、1日



患者に話しかけ、散歩に付き添うなど、患者にとって心安らぐ存在の佐野秀子さんの役割は大きい



看護部の大原しん子産業カウンセラー

1〜2時間からでも働いて、一般雇用を目ざす、個別の就労支援も行っている。

一ノ瀬さんは「働きたいという意欲を一番大切にしている」と話す。

「個人の能力や個性、性格に合わせて業務配置をして、上司やジョブコーチの資格を持ったスタッフが連携を交わすことで現場につなげています。その人の病気をよく理解し、偏見を持たないで接すること。採用後2週間はマンツーマンで指導して、不安を払うためによく話をする。本人が頑張りすぎないように気をつけて、労働時間は柔軟に対応しています。配属される病棟の職員には事前に障がい特性を話したり、心配している事を話し合っています。また、精神科病院独特の鍵の大切さをよく説明して、採用から3カ月の間には鍵を渡して、自己管理をもらっています」

看護部の産業カウンセラーでキャリアコンサルタントの大原しん子さんは、現職に就いて7年。以前21世紀職業財団で就労支

援の相談業務をしていた経験を生かし、就労支援にあたる。

「私は、『HEART・fuller メッセージ』2008の理念に共感しました。病院のなかで就業・生活支援センターやケアと連携を取りながら、利用者の希望に沿った就労支援をしています。病院で働きたいという方には、看護部の情報を集めて、業務を紹介するようにしています。その方がいかに生き生きと楽しく、いまの生活がエンジョイできるかを支援することが、私の役目だと考えております」

すみよし障がい者就業・生活支援センターで生活支援を担当する渡辺智史さんは、昨年度までは作業療法士として病院に勤務していた。

「法人の強みは、当事者一人ひとりに合わせた業務を選択できることです。組織にどう貢献するかを考えていく姿勢は、当事者も一般職員も、一緒だと思います」

精神疾患を持つ職員に対しては、就労支援委員会、懇談会などを月1回行い、就労ミーティングを毎週開く。一ノ瀬さんと渡辺さんは、懇談会で一人ひとりの状況や悩みを聞いたり、病院行事などの動きを伝えたり、細かいことまで話し合うようにしている。

渡辺さんは、「障がいとつきあいながら働く当事者たちは専門家」との思いを持つ。「例えば、佐野さんは入院経験があるため、医療従事者から、されてよかったこと

や嫌なかわりをそれぞれ知っています。また、回復するきっかけには『主体的な活動の獲得』というリカバリーへの道標を対人援助職として提供しています。鍵のかかった病棟から散歩に連れ出してくれたり、『やりたいこと』に注目することで患者さんを元気づけています。障がいを背負った経験は医療従事者では提供できない励ましや助言ができる特別な専門性です。専門性を強みとして活かし、患者さんに貢献できる術を考える支援に、同僚として意味を感じます」

前出の鈴木さんも、自身が話しかけることで、患者の心を開くことができた。その働きを職場で評価されたことで、自分の自信にもつながったという。かつては入院し、決して障がいが軽くなかった人たちが目の前で働いている姿は、患者たちに大きな希望と勇気を与えているに違いない。

病院での就労をきっかけに、 広く社会へ

一ノ瀬さんは、「精神障がい者の雇用は普通のこと」と受け止めている。

「当初は心配でしたが、これまでに困ったことは特にありません。彼らが医療・介護の現場で働くことによって、患者さん、障がい者の方に『自分も働けるかもしれない』という希望を与えることができます。障がいがあっても努力する姿に、あんなに大変だった人が働けるようになったと、一



すみよし障がい者就業・生活支援センター、
渡辺智史さん

般職員のモチベーションアップにもつながっていると感じます。一般の人でも、最初は支援が必要です。障がいがあっても、適切な支援があれば働くことができると思います。ときには入院しますが、それもほかの職員と同じです。仕事ぶりはまじめで、患者さんのために役立ちたい、ほかの職員の期待に応えたいという気持ちが伝わってきます」

一ノ瀬さんは新たな業務も考えている。「業務の工夫が、いまからの課題です。看護補助員は清掃や配膳などが一般的な仕事ですが、寝たきりの患者さんの足腰や背中をマッサージしたり、思い出話、苦労話を聞いて、安らぎの時間を持つてもらえるような仕事も始めたいです。医療現場のなかで、『障がい者が働きやすい職場』は、すべての人が働きやすい職場』から、『障がい者が働きやすい職場』へ、試行錯誤をしていきたいと思っています」

住吉病院では精神保健福祉手帳を取得して働く14人のほかに、通院・服薬をしながらも精神保健福祉手帳を返上したり、手帳を申請していない職員をほぼ同数、障がい者雇用の枠にとられずに雇用している。そのうち毎年2〜3人が一般企業にも転職する。大原さんは「病院で働くことが、就労のきっかけになれば」という。

「ここで働くことが就労のきっかけであって、ステップアップして企業で働ければ素晴らしいことです。そういう形の就労支援も、法人としての役割の1つとしてとらえています。障害者手帳を持っていないと雇用率にカウントできないので、採用のネックになることは理解していますが、そこは働く当人と企業とで話し合って、当人が納得できれば手帳を取得して、会社のカウントにのせていただく。本人がその会社にならだけ魅力を感じて働く気になるかどうかだと受け止めています」

精神障がい者の就労が大きなテーマになっている今日、精神科病院とつながりがある就業・生活支援センターへの期待がかかる。渡辺さんたちの役割は大きい。

「医療現場での経験はその方の個性や価値に注目する大きな学びとなり、就労支援においても、その考えは活かされています。院内就労はゴールではなくスタート。日々更新されるその人のチャレンジに、どうサポートできるかがテーマだと思います。その手立てとして、働き続けるためのプラン

を準備するプロセスに重点を置きます。いわば、自分自身の説明書（体調管理法、注意サインなど）を協働作成する作業です。そのプロセスは、働き続けるためのヒントや職場での効果的な支援を知るきっかけにつながり、『働いてどうになりたいか？』生活者としてごく当たり前の気持ちを探求するツールになると考えます」

野川さんも、「法人での就労経験を基礎にして、一般企業での就労を目指す職員が増えていくこと、働いて元気になる人が1人でも多く増えるように努力していきたい」と話す。

一ノ瀬さんに、精神障がい者が働くうえでの企業へのメッセージを聞いた。

「人と人とのかわわりが大事なことが大前提ですが、一緒に働くことはごくごく普通のことだと思います。彼らは真面目なので『具合が悪いときは休むのが、長続きするコツ』と教えて、休みやすい雰囲気をつくるようにしていますが、そう話しては一般企業には参考にならないでしょうか」

そんなことはないと思う。さまざまな問題を抱える現代社会では、働き過ぎで心の病にかかる人が多いのだから。

働けるようになった喜びにあふれる、重廣さんの言葉が印象に残った。

「いつか病歴より職歴に目を向けてもらえるような人になりたい。私は、元気になったから働いたわけではありません。私は、働いて元気になりました！」